OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プロクロス『プラトン『国家』註解』第5論稿の研究
Author(s)	加藤, 浩
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2010, 44, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3737
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

プロクロス『プラトン『国家』註解』第5論稿の研究

加　藤　　浩

はじめに

新プラトン学派の詩学は不当に無視されてきた論題である。[1] 近年刊行された古代の文芸理論に関する論文集において、その形而上学的傾向性が手短に指摘されるのみであって、それに関連する論文がそこに一編も収録されていないという事実からもこのことは忖度するに難くはあるまい。[2] しかしその一方で、1970年以降、Coulter、Sheppard、Lamberton、Bernard、Kuisma、Cürsgen、Pichlerなどの著書が公刊され、また、ミーメーシスという視点からのHalliwellの考察が現われなどして、新プラトン学派の詩学にも一定の眺望が与えられることになった。一般に、新プラトン学派の詩学の特徴は詩のアレゴリー解釈であるとされるが[3]、それを集中的に取り扱っているのがプロクロス『プラトン『国家』註解』（以下、『註解』と略記）である。伸張しつつあったキリスト教勢力に対抗し、ギリシア宗教を形而上学的に基礎付けることがプロクロスにとっては焦眉の急務であった。[4] 聖書の釈義に立脚するキリスト教徒の解釈学に対し、オルフェウスとカルダイア神託、とりわけプラトンの哲学の新プラトン主義的再構成とホメロスの叙事詩のアレゴリー解釈がプロクロスの形而上学的神学を根底において支えていた。そうした中でも特に『註解』の第5論稿および第6論稿は、プラトン『国家』の論述に一部即しながらも、プロクロス自身の哲学的詩学を展開している点において注目に値する。[5] 新プラトン学派の詩学を再構成する一連の作業において、本稿ではまず『註解』

第5論稿を単独で取り上げ、プロクロスの詩学についての予備的考察を試みる。

1. プロクロスの生涯と著作

『註解』第5論稿の考察に先立って、プロクロスの生涯と著作に関して、原則的な仕方で略記しておく。プロクロスの伝記的史料としては、彼の弟子であり後を継いでアカデメイアの学頭になったマリノスの『プロクロス、あるいは幸福について』という追悼文がある。[6] プロクロスは、412年にビザンティオンで生れ、リュキアとアレクサンドレイアで弁護士になるべく修学していたが、20歳になる直前にアテナイに赴き、アカデメイアのプルタルコスとシュリアノスに師事した。シュリアノスの没後、437年にアカデメイアの学頭に就き、485年に没するまでそこで教育と研究に専心した。衰微の一途を辿っていたアカデメイアを引き継いで再興したところから、プロクロスは「ディアドコス（後継者）」と呼ばれた。

プロクロスの著作は内容上おおよそ四つに分類される。（現存しているもののみを以下に記す。）1.哲学的著作としては、『神学綱要』『プラトン神学』『自然学綱要』、ラテン語訳が現存するものとしては、『摂理について』『運命について』『悪について』がある。2.プラトンの著作への註解としては、『『ティマイオス』註解』『『パルメニデス』註解』『『国家』註解』『『クラテュロス』註解』『『アルキビアデス』註解』がある。3.科学的著作としては、『天文学的諸理論の概要』『エウクレイデス幾何学原論第1巻註解』がある。4.文学的著作としては、『讃歌』がある。[7]

2. 『註解』の概要

『註解』をフランス語に翻訳したFestugièreによれば[8]、『註解』はプロクロスの他の注釈書とは異なり、プラトンのテクストを逐語的になぞるも

のではなく、『国家』の各巻の配列におおむね対応する17篇の論稿より構成されたものであって、その内、第1論稿の後半、第2論稿のすべて、第3論稿の後半が欠損している。形式的には、問題を提起しそれぞれの問題に対する解法を提示するという、註解書に広くみられる論述方式を踏襲している。分量的には、ホメロス弁護を展開する第6論稿と「エルのミュートス」の釈義を行う第16論稿が突出しており、『国家』の哲学的核心部分とされる第5巻、第6巻、第7巻などについてはさほど論述を充当しておらず、内容と分量のバランスを斟酌する場合、いささか偏頗であるとの印象を与える。とはいえ、『註解』第5論稿と第6論稿は、『国家』第2巻、第3巻、第10巻における詩論を敷衍拡充し、さらに進んで、形而上学的・神学的・降霊術的・政治学的・教育学的・心理学的・音楽学的・弁論術的・詩学的な視点に立脚しながら、プラトンとホメロスの一致を新プラトン学派の哲学体系から説明しようとする壮大な構想を打ち出しており、その限りにおいて、プラトンが詩作に対して投げかけた問題が古代末期においていかなる相貌をもって立ち現れたのかを知らしめるがゆえに、古代ポイエーシス理論史の解明にとっては尽きせぬ源泉となっている。また、第10巻後半の「エルのミュートス」の注釈は、プラトンのミュートスが新プラトン学派においていかに解釈されていたのかを知ることのできる格好のテクストであって、一見したところ詩学とは無関係のように見えるかもしれないが、ミュートスこそはポイエーシスの基底を成しているのであるがゆえに[9]、それはポイエーシス理論史にとって看過しえない問題を提起する。[10] それゆえ、『プラトン『国家』註解』という名称は多分に誤解を招きやすいものなのである。ところで、第5論稿は、10の問題を提起しそれぞれの問題に対する解法を提示する。多岐にわたる論点の詳細はおって検討するが、そこでの考察は第6論稿の議論の前哨を成すものとして配置されていると概ね言うことができよう。第6論稿は2部構成になっ

ており、その第1部は18の問題とそれぞれの問題に対する解法とから成り、第2部は6の問題とそれぞれの問題に対する解法とから成っているが、Festugièreによれば[11]、この第6論稿は、序論と結論を備えた単著の体裁をとっているという。第1部では詳細を極めた神話のアレゴリー解釈が繰り広げられ、新プラトン学派の哲学に基づくいわば弁神論が展開する。こうした議論は、プラトンの哲学とホメロスの叙事詩が根本において一致することを形而上学的神学的に証明するために準備されている。第2部では、プラトンのホメロス批判の真意が仔細に検討されるが、その際、生の様式に応じて詩を3種類に区分する議論が導入されることになる。[12]

3. 第5論稿の検討

既に述べたように、第5論稿では10の問題の提起とそれぞれの問題に対する解法の提示が行われている。内容的に重複する部分もあるが、プロクロスの論述を追いつつ全体を検討しよう。

第1問題（1.43.26-49.13）＊

第1問題は、プラトンが詩人を正しく統治された国家から追放したのはなにゆえか、そして追放するに際して、尊きものとして詩人を処遇しているのはなにゆえか、というものである。[13]『国家』を一読すれば明らかなように、プラトンはかなりのアイロニーを込めて語っているのではあるが、プロクロスは、プラトンの論述の整合性を信頼して、正面から真剣にこの問題に取り組む。新プラトン学派の哲学者においてしばしば見受けられるように、プロクロスもまたここで、「プラトンのアイロニーを真剣には受け取らないという過ちを避けるために、プラトンをあまりにも真剣に受け取ると言う反対の過ちに陥っている。」[14] ところでさて、この問題への返答の結論を先取りして述べれば、それは、詩人はミーメーシスを行うが、そのミーメーシスが似つかわしくなかったり（ἀνομοίως）、似つかわ

しくとも色とりどり（ποικιλία）であったりするから国家より追放されるが、しかしにもかかわらず詩作はムーサの息吹とともに人間のもとに訪れた聖なるものだから最大の敬意をもって処遇されねばならないというものである。プロクロスもプラトンに従いミーメーシスの対象を二つに大別する。すなわち、神々や英雄についてミーメーシスする場合と人間についてミーメーシスを行う場合がそうである。[15] ミーメーシスを行う者は、「事柄の似像となることを意図するような、事柄に固有の想念を提供し、この想念に相応しい言葉を選び出さねばならない」（44.21-22）が、詩人は往々にして、神々に関しては「神々についての真理を覆う幕として醜い言葉を用い」（44.13-14）[16]、英雄に関しては、「英雄に関わる事柄を人間的な性格に似せてはそれを言葉と同じ様態、すなわち、金銭欲、奴隷根性、法螺吹き、放埒へと引きずり下ろす。」（44.10-13）このように、プロクロスが似つかわしくないミーメーシスと呼ぶのは、神々や英雄といった描写対象に適合せず、相即していない模倣のことである。こうした着想は言うまでもなく、詩人が提示する神観や英雄観に抗してプラトンが樹立する神学の規範に基づいている。プラトンは神の善性と無偽をその神学の基礎に据え、神々の末裔である英雄に関してもこれに準ずる規範を規定している。[17] それはいわばある種の弁神論の根本原理としてプロクロスの形而上学的神学、ひいてはその哲学的詩学の基底を成す。プロクロスは神々についてのミーメーシスと英雄についてのミーメーシスを次のように区別している。「プラトンは、美しい言葉を通じて真理を秘匿するものを美しい嘘と呼び、神々についての物語に関わる詩作に関して、美しく嘘をついていないとしばしば述べる習いである。英雄に関わる事柄のミーメーシスについては、美しく嘘をついていないと述べるのではなく、英雄をまるで人間であるかのような姿で示すミーメーシスは、総体として嘘をついていると述べている。そこで、真実を語らねばならない場合に、詩人が英雄に対して差し向けてい

る様態が不適当であるがゆえに、嘘をついていると述べ、嘘をつかなければならない場合、詩人が神々の物語の中に取り入れている言葉が神々とは適合していないがゆえに、美しく嘘をついていないと述べているのである。」（44.24-45.6）しかし、いみじくもHalliwellが端的に指摘するように[18]、プラトンにはこうした区別立ては存在していない。プロクロスが主張しようとしていることとは要するに、神々をそのままミーメーシスすることは不可能であるため偽りを用いなければならないが、その偽りは内に神々についての真理を秘匿した美しい言葉でなければならず、一方、半神半人の英雄については、人間とのつながりからできるだけその実相を捉えた真実の言葉を語らねばならないということであろうか。またプロクロスは、詩人がこうした過ちを犯す原因を『ティマイオス』（19D6sq.）の記述を基に、ミーメーシスにかかわる者は、彼の成長した環境についてはうまくミーメーシスすることができるが、その外にあるものをミーメーシスすることができないという洞察の内に求めている。そして、『法律』における「正しさを伴った善さ」という規定をミーメーシスに適応する。[19] 一方、人間に関わる事柄のミーメーシスについては、「多種多様の性格や性質の生き生きとした似姿を作り出しては、勇敢な人々、節制ある人々、思慮ある人々と同様に怯懦な人々、放埒な人々、無知な人々をミーメーシスする。」（46.8-10）と述べ、色とりどりさを批判の理由としている。[20] プロクロスもまた、人間の魂はミーメーシスされたものに快を感じることでそれに同化するというプラトンの基本テーゼ[21]に従って、そうしたミーメーシスの害悪を告発する。かつ、詩人が色とりどりのミーメーシスを作り出す原因もまた、似つかわしくないミーメーシスを作り出す場合と同様であるとする。プラトンにおいては、人間について語られるべき物語の規定は具体性を欠いているが、プロクロスの場合、神々と英雄に関する物語との対比で、人間について語られるべきにも一定の具象性が賦与されているこ

とは注目してもよい。なお、詩作はムーサから人間のもとに遣わされたものであるがゆえに、詩人を国家から追放するにせよ、敬意をもってせねばならないと述べる文脈において、次のような注目すべき記述がある。「確かにプラトン自身も述べているように、偽りとともに神々に関わる事柄をミーメーシスした詩作も神殿の中央に場を占めているのであり、そこでは象徴的（συμβολικῶς）に語られる言葉は、神事への奉仕全体に相応しいものとして現れるし、それらを聴取することはすべての聖儀に貢献するのである。最末端の神霊すらもそれらを通して招じ入れられるところの言葉を既に聴いているのであるから、聴く者の生命それ自身は神々の内にしっかりと打ち立てられている。神霊はそうした象徴によって魅惑し、神の息吹が神霊から私たちに妨げられることなく流出してくる（προιέναι）ように力を貸すのであるが、まるで神霊は自らの好む言葉と事柄とによって満たされているかのようである。」（48.1-10）[22] もちろんプラトンの現存対話篇においてこうした発言を確認することはできないが、プロクロスの用いている「象徴」という語、あるいは「流出」の教説は彼の詩学の基礎を成すものであり、ゆえにそれらは第6論稿を先取している。[23] 神々についての詩人の言葉は、神々の息吹を人間に伝達する力を秘めており、これに与ることはごく限られた少数の者にのみ許された秘儀なのである。いわゆる降霊術と詩学の融合がここでは顕在化している。[24]

第２問題（49.13-51.25）

第2番目に取り上げられるのは、悲劇と喜劇を通じて感情を適度に充足させ、充足させてから、感情の病んだ部分を癒すことで、感情を教育の役に立つ状態に保つことができるのであるならば、悲劇と喜劇が追放されるのは理（ことわり）にかなわないのではないかという感情効果の問題である。この問題は、アリストテレスやプラトンの敵対者に、悲劇と喜劇を追放しているプラトンを批判するための多くの機縁を与えたとされる。[25] プ

ロクロスは、悲劇と喜劇を追放する理由を次のように三つにまとめている。すなわち、1.悲劇と喜劇におけるミーメーシスの色とりどりさ、2.プラトンが抑制しようと望んでいる感情を過剰に惹起するということ、3.神的な種族と英雄の種族に対して過ちを犯していても悲劇と喜劇がそのすべてに無頓着であるということである。悲劇と喜劇は、神の属性である「一」と単純性からは最もかけ離れた多様な人物を造型し、その色とりどりのミーメーシスで魂の中に入り込み、それを自分に同化させることで害悪を為す。しかも、「浄化（ἀφοίωσις）とは超過に存するのではなく、浄化の対象となっている感情に対してわずかな類似性（ὁμοιότης）を伴う適度の活動に（ἐν συνεσταλμέναις ἐνεργείαις）存するから」（50.24-26）、過度に感情を惹起して、感情への惑溺を助長するような色とりどりさは排除されねばならないわけである。もしこれがアリストテレスへの反論であるとすれば、プロクロスはアリストテレスのカタルシスを同症療法（homéopathie）的な「吐瀉（ἀπέρασις）」（50.18）と解釈しているようにも見受けられる。[26] もとより、アリストテレス『詩学』第6章悲劇の定義（6.1449b24-28）におけるカタルシス句は明確な規定を欠いているために、同症療法的カタルシス解釈はむしろ『政治学』（8.7.1341b32-1342a16）における音楽のカタルシスの規定を悲劇に転用することによって成立するものであるが、Bernaysを代表とする同症療法的カタルシス解釈の支持者は、プロクロスのἀφοίωσιςの定義の内に同症療法を読み取り、それを音楽のもたらすカタルシスともリンクさせながら、『詩学』における悲劇のカタルシス解釈を導き出そうとするわけである。ただし、アリストテレスへの顧慮を一先ず括弧に入れて、プロクロスの論述に即応しつつテクストを読むならば、プロクロスが浄化に求めるのは、過剰な感情の吐瀉ではなく、感情の適正な均衡の保持であり、その限りではプラトンの立場を堅持していることが明らかとなろう。いみじくもSheppardが結論付けているように、「プロクロ

スが行っていることは、感情を浄化することに価値は認めながらも、悲劇と喜劇がこの価値ある機能を果たすのを否定することで、プラトンとアリストテレスを調停することなのである。」[27] また、悲劇と喜劇には神々を冒瀆する不敬な言辞が満ち溢れており、「若者がそういった話を信じるのならば、彼らはティタン族の生と無神論的表象を養い、それが強められると徳の合唱隊全体は滅びてしまう」（51.10-12）のである。見解の邪悪さ、感情の過剰、生全体における色とりどりさという三つ悪徳のうち、最初のものは、私たちの内なる認識能力に関わるそれであり、次のものは、欲求能力に関わるそれであり、最後のものは、魂全体に関わるそれであるが、プラトンはこれらの理由をもってして悲劇と喜劇を国家からは完全に追放したのであるとプロクロスは解釈している。

第３問題（51.26-54.2）

第３番目の問題は、プラトンは『饗宴』（223D2sq.）においては悲劇と喜劇の創作は同じ技術に属することを同意するように強いている一方で、『国家』（2.395A1sq.）においてはこれらはお互いには似ておらず、これらを創作することは同じ能力には属していないと述べているが、どのようにして彼は自己自身と矛盾なく一致しているのか、という問題がそれである。『国家』における主張の根拠は次の通りである。すなわち、私たちの本性は細分化されているため、それぞれの本性が異なったものに関わるように生まれついており、その結果、悲劇だけを例にとってもすべての人々がこの詩のすべての部分に同じように関わるのではなく、ある人々は悲劇のある部分で成功を収め、また他の人々は他の部分で成功を収めるのであって、喜劇に関しても事情は同じである。これを踏まえてプロクロスは、私たちの本性が細分化されていることをおおよそ次のように詳説する。つまり、真の生において魂は宇宙的なものであって、全体へと眼差しを向けて、生成をとるにたらないものと見なして、神々とともに万有を統御す

る。この世の生への下降は、魂が全体と万有からより部分的なものへと導かれることで生じたのであるが、魂は、以前にはそれに従って生きていたところの宇宙的な理から死すべき生き物の理のみを選択し、そして、すべての死すべき生き物を一つのものとして配慮するかわりに、より部分的な別の理、つまりは人間的な理を持ち出し、人間に共通の理を放置して、例えば哲学者といったようなある特定の人間の生活に従って自らの生を打ち立て、特定の地域、特定の国家、特定の種族における生活を身に纏い、そのようにして全体的となるかわりに部分的となり、こうした状態への墜落から、爾後、異なった傾向をさらに身に付けることになる。その結果として、魂の本性は実際に細分化されており、異なった技術、知識、営みに対する傾向を狭めたのであるがゆえに、ある人々は喜劇を、他の人々は悲劇を創作することができるのであるが、喜劇を全体として創作することはできないのであり、すべての悲劇に関しても同様である。もっとも、プロクロスが説くような魂降下論をプラトンは提唱しているわけではなく、国家の成員全体が自分の本性に最も適した一つの仕事に従事すること、すなわち「自分の事を為す（τὰ αὑτοῦ πράττειν）」という根本原則を国家建設の端緒に据えていたのであった。ここでもまた、プラトンの論を巧妙に新プラトン学派的教説に組み込もうとする姿勢が端的に表れている。ところで、プロクロスによれば、詩作には、悲劇と喜劇のそれぞれをどのように取り扱うべきであるのか、いかなる部分を設けるべきなのか、その部分はどのように秩序付けられるべきなのか、どのような人物を登場させるべきなのかといったことに関わる詩作術的認識[28)]と、主題となっている事件と登場人物に相応しい性格描写[29)]とが必要であるが、このうち詩作術的認識の方は悲劇と喜劇において同一であるから、『饗宴』においてソクラテスも悲劇と喜劇を実際に創作することではなく、悲劇と喜劇を創作する＜知識＞が同じ人に属すると主張しているのである。「従って、ソクラテスが

技術に関わる側面を性格描写に関わる側面から切り離し、ときに、同じ人が両方の詩を創作する仕方を知っていると述べ、ときに、同じ人が両方の詩をミーメーシスすることはできないと述べたのは至極当然なことであったのである。」(53.26-28)[30]

第４問題（54.3-56.19）

第４番目の問題は、ソクラテスは調べの差異については知らないと言いながら、しかもリズムについてはピュタゴラス主義的音楽理論家ダモンからなにがしかを聴いていると言い、「なにせ君は音楽通だから。」と付け加えたうえで、リズムの認識をグラウコンに委ねているのは、どうしてなのかというプラトンの論述に認められる齟齬に関するものである。[31] プロクロスは、調べとリズムについてなにがしかのことを語るのは政治家に相応しいのであるが、それは音楽家としてそうするのではないと主張する。すなわち、若者を正しく導いて教育することに通じている調べの種類はどのようなものであるべきかを規定するのは政治家の仕事であり、調べの内に存する差異を正確に特定し、魂の苦を好む部分を覚醒させる調べ、快を好む部分を弛緩させる調べ、両方の部分の運動を整える調べとはどのようなものであるのかを考えるのは音楽家の仕事である。それゆえ、政治家は音楽の素養を欠いていてはならないし、音楽家も政治音痴であってはならない。そこで、ソクラテスは国家の制作者として政治家に相応しい分を守り、調べの判定は他の人々に委ね、彼自身はただ教育に貢献する調べの規範の輪郭だけを描いているのである。同様にプロクロスは、将軍、医者、弁論家を例に取り上げながら、政治家の仕事を明確化する。つまり政治家は、戦争の目的、医療の目的、弁論の目的を規定するが、戦術の細目は将軍に、医療の方法は医者に、弁論の選択は弁論家にそれぞれ委ね、自らは規範の選別のところに立ち止まる。従って、調べに関しては、「あらゆる行為、状況、感情において教育を受ける者を整えられた状態に置き、強制的

で意に反した場面でも勇敢に振る舞えるようにし、生の緊張を弛緩させることなく、自発的で意に適った場面でも節制を保ち、目下の幸福のため調子外れとならないようにするような調べへと、教育をする者は眼差しを向けねばならない。」（55.20-25）というように政治家は一般的な規定を与え、調べに存する差異の細目は音楽家に委ねるのである。ソクラテスが調べに関しては知らないと言うのは、このような意味においてなのである。一方プロクロスは、ソクラテスがリズムに関していくばくか語るのは、調べと調べの種類は知っているが、リズムについては知らず、しかもリズムのうちのあるものが教育に相応しいかどうかをも判定できないと語っていたグラウコンの無知が原因であるとする。「そこで、リズムの力に関して指示を与え、音楽全体と音楽が教育に対して果たす貢献に関しての彼の議論が未完成のままに残されることがないようにするために、リズムにおいて教育の役に立ち徳へと導く要素はどのようにしてあるのかについて規定を与えながら、ソクラテスがリズムに関してわずかながら語ったのは当然のことである。」（56.3-6）ただしソクラテスは、政治家としての分を守り、リズムの細目に関してはダモンに委ねているのである。そこからソクラテスは、魂全体へと眼差しを向けながら、教育に携わる者は善き言葉、善き調べ、善きリズムを目指さねばならないという結論を導き出しているのである。

第5問題（56.20-60.13）

第5番目の問題は、ムーシケー[32]と詩作について何を知るべきであるのか、ムーシケーと詩作は相互にどういった関係にあるのか、ムーシケーにはどのような序列があるのかというものである。プラトンは、『パイドロス』（245A）や『法律』（4.719C）においてムーサからの霊感を語るときにはムーシケーと詩作を結び付けているように見えるが、同じ『パイドロス』における「アドラステイアの掟」の中でムーシコス（ムーサの

徒）を第1位に位置付けながらも（248D3）、ミーメーシスに携わる詩人を第6位に位置付けるとき（248E1）、ムーシケーと詩作を相互に分離しているように思われる。この問題は、今日でもなお依然として研究者の関心を集めている。[33] プロクロスは、プラトンがムーシケーの多くの種類を考察したうえで、詩作のすべての部門をムーシケーのもとに関係付けてはいるが、すべてのムーシケーの部門を詩作に限定してはいないと考えて、4種類のムーシケーを区別する。第1に、『パイドン』（61A3）における「哲学は最大のムーシケーである。」という規定が取り上げられる。哲学は、「リュラではなくまさしく魂を最善の調べにおいて調律し、この調べのおかげで魂は、ムーサの先導者（アポロン）に倣いつつ、人間に関わる事柄すべてを秩序付け、神々に関わる事柄を完璧に讃え歌うことができる。ムーサの先導者は、英知的な歌で父（ゼウス）を讃え、『クラテュロス』（405C6sq.）でソクラテスが述べているように、すべてを一緒に動かしながら、解かれることのない鎖で宇宙全体を一つに保持している。」（57.10-16）[34] それゆえ、ムーシケーに精通した者の中で最高の位置を占めるのは、真の哲学者と同一の人物である。第2番目のムーシケーは、詩人のそれである。『パイドロス』（245A）の有名な一節「ムーサからの狂気なしに詩作の門を訪れる人があっても、その人は不完全な詩人に終わり、正気にある彼の詩は狂気にある人々の詩によって消されてしまうのである。」を引用してプロクロスは、ムーサからの霊感を受けて神憑るのは詩人となるためであって、神憑った詩人はその詩によって後世の者たちを教育するという使命を担っているとする。ところで、詩人の行う教育は、立法者のそれとは異なり、『国家』第10巻（597E7sq.）で述べられているように、「真理から遠ざかること三番目」である。すなわち、その教育方式とは、徳に従って生きた人々といわば知り合うことによって、彼らをミーメーシスしつつ他の人々を徳へと導くことである。要するに、詩人は、具体的な実例

を挙げて、詩を聴く者を徳へと導くのであり、普遍的な範例を基にして教育を行う立法者とは異なっているのである。ここで注目すべきは、「真理から遠ざかること三番目」というミーメーシスに与えられる存在論的規定が、教育方式の差異に帰着するものとされている点である。通常この規定は、ミーメーシスである詩が教育に参画する資格がないという帰結をもたらすものとして解釈されているが、プロクロスにおいては、そうした批判意識は一見したところ背後に退き、むしろそれによってミーメーシスとしての詩に対していわば独自の領域が措定されているようにも見える。[35] 第3番目には、もはや神憑りではないが、目に見える調べから神的調べの目に見えない美へと導くムーシケーがあり、それに携わるのは『パイドロス』の「アドラステイアの掟」の第1位に置かれているムーシコスである。聴覚を通して美を想起するムーシコスは、視覚を通して美を想起するエローティコス（エロースの僕）とともに、フィロカロス（美を愛する者）である。従って、「アドラステイアの掟」第1位には、フィロソフォス（知を愛する者）、エロ－ティコス、ムーシコスの三人が来ることになる。「ムーシコスは調べとリズムに存するある種の美に対して活動し、そこから、目には見えず、もはや聴覚を通じては認識されないが、悟性の推論によって姿を現すかの調べとリズムへと上昇して行くし、エロ－ティコスは、ある種の美ではなく、端的に美（それ自体）を想起させる、感覚に存するすべての美に対して活動するが、フィロソフォスは、すべての感覚される形姿から、感覚されるものがそれの似像であるところの思惟されるものの観照へと赴き、ムーシコスとエロ－ティコスの目的を先取りしていたのである。」（59.8-16）ここにおいて、ムーシコスはフィロソフォスと対をなすものとして位置付けられることになる。とすると、第3番目のムーシケーと第1番目のムーシケーは同一になるのではなかろうか。両者の差異は神憑りか神憑りでないかというものでしかない。しかし、ここで述べられてい

る神憑りの意味は今ひとつ判然としない。神憑りの有無だけで哲学者を二分割する根拠が明らかではないからである。第4番目には、教育的ムーシケーが来る。これは、ギュムナスティケー（体育）と対をなすものとして主に『国家』第2巻と第3巻において論じられるものである。「このムーシケーは、いかなる調べとリズムが魂の情態を教育し、すべての行為と状況において最善の習慣によって魂を造型することができるのか、また、これとは反対にいかなる調べとリズムが魂を緊張させたり弛緩させたりして調子外れにして、不調和と拍子外れに導くのかを発見する。」（59.22-27）ここでもまた、詩作としてのムーシケーが二つに区分されるわけであるが、両者とも教育的有用性を有しているとすれば、本質的には一つではないかと思われる。さて、ムーシケーを四つに区分するプロクロスの結論は、詩作をムーシケーの内に包摂しつつも、魂を上方へと導き上げるムーシケーをミーメーシスとしての詩作からは区別するというものであろう。（60.9-13）かなり錯綜とした議論ではあるが、Sheppardの指摘するように、プラトンに精通しているプロクロスは詩作をことさらに高くは位置付けてはいないことだけは事実であると思われる。[36]

第６問題（60.14-63.15）

第6番目には、プラトンは、詩人が取り扱うべきものとして、いかなる種類の調べが教育にとって有用であると判断しているのか、また、どのような種類のリズムが選び出されているのかという問題が来る。教育の中に受け入れるべき調べとリズムの具体相の詳細な究明が行われた結果、調べとしてはドリス調、リズムとしてはダクテュロスが受け入れられることになる。[37] また、調べとリズムにおける色とりどりさを排除するために、三角琴や笛といった多弦的な楽器も追放されることになる。約言すれば、「プラトンにおける詩人はミーメーシス、調べ、リズムのいたるところで二つのもの、すなわち美と単純性に眼差しを向けていなければならない。それ

らの一方は英知的であり、他方は神的である。なぜなら、魂は自分に先立って存在しているこれらに似せられねばならないからである。すなわち、魂の後に肉体と質料があるが、質料は醜であり、肉体は合成されたものである。」（63.10-15）

第7問題（63.16-65.15）

第7番目には、プラトンは同時代の詩人たちの過誤とは何であると述べているのか、また、いかなる理由でムーサ自身は決して誤ることがないであろうと述べているのかという問題が来る。いやしくもムーサは詩人たちが犯すような過ちなどを犯すはずなどはなかったということ[38]が示すのは、詩人たちが真のムーシケーを逸脱して、大衆を満足させるようなムーシケーに赴いているということである。それゆえに、同時代の詩人たちの犯している過ちは二つある。まず第1に、ミーメーシスしている生の形式に固有であるような言葉、調べ、リズムを作っておらず、女に男の台詞を、男に女の台詞を、しかも優れていない女の台詞を結び付けているというものである。臆病者に勇気ある人のリズムを割り当てたり、逆の割り当てをしたりすることがそうであるように、こうした過ちは正しいミーメーシスには属するものではない。第2に、言葉に調べが、調べにリズムが従わねばならないにもかかわらず、調べとリズムを言葉の種類と一緒くたにし、結ばれていないものを結び付けるというものである。例えば、悲嘆に満ちた台詞にドリス調を押し付けたり、勇敢な台詞に悲しい調べのリュディア調を押し付けたりする場合がそうである。想念（ἐννοία）は事柄に従うべきであり、この想念は言葉において主導的な力を持つ。[39]リズムが調べに従うのが相応しいように、調べは言葉に従うのが相応しいのである。ところで、プラトンはこのように詩作を定義し、言葉、調べ、リズムといった要素の規矩を提示しているのであるから、プラトンこそは詩についての最良の判定者であるとプロクロスは主張する。『ティマイオス』（21C3sq.）

においてプラトンがソロンの詩を高く評価しているところから、当時、プラトンの詩についての判定能力に疑問を投げかける者がいたが[40]、プロクロスは、プラトンの讃辞は、ソロンの詩に認められる言葉と思想の自由闊達、つまりは、多くの詩人が大切だと考えるような言葉の醇美だとか思想の色とりどりさは気にかけない態度を狙いとしており、その限り、プラトンの評価は正鵠を得ているとする。[41]

第８問題（65.16-67.9）

第８番目には、プラトンに従えば、最良の詩人とはいかなる人であり、取り扱われている事柄と使用されている言葉のどのような卓越性に基づいてそのように特徴付けられるのであるのか、という問題が来る。[42] 詩人は事実の話（ロゴス）ではなく神話物語（ミュートス）の作者でなければならないという『パイドン』（61B3sq.）の言葉からして、まず詩人は、主題に似つかわしい物語を作らねばならないのであって、似つかわしくない物語によって主題を隠蔽しようと望んではならない。自然を表示する言葉の中から本性にかなったもの、道徳を表示する言葉の中から法にかない、常に美と善によって装われているものに相応しい言葉を選び出さねばならない。こうした言葉は神々についての想念に相応しい「幕」であり、この「幕」は神々の後に来る事物から神々のために取り出されたものである。英雄や人間について語る場合、すべての隠蔽を離れて、英雄についてなら、半神半人に相応しい平静さを彼らに分与する英雄に相応しい詩を創作せねばならないし、人間についてなら、善き人々を称讃することを常に目指している詩を創作せねばならない。一方、言葉遣いの点からすれば、語り方は思想に従い、なによりも叙述的であり、先に述べた想念にしっかりと結び付いていなければならないが、どこかでミーメーシスが必要となったならば、必然的にそのミーメーシスは色とりどりさを分け持ってはならず、むしろそれは善き人々だけのミーメーシスでなければならない。[43] 調べとリ

ズムに関しても同様に、徳を目指すものを尊重し、とりわけこれを用いなければならない。それゆえに、「プラトンによれば、詩作術とは、聴衆の魂を徳の状態に置くことのできる、調べとリズムを伴う神話物語と言葉を通じてミーメーシスを行う能力ということになろう。」（67.6-9）これは、プロクロスがプラトンから読み取った詩作術の定義というべきものである。

第9問題（67.10-68.2）

第9番目には、プラトンに従えば正しい詩作の目的とは何であるか、という問題が来る。プロクロスは、詩作の目的を快であるとする立場を批判するために、『法律』における次のような推論を用いている。「詩人はミーメーシスを行う者である。すべてのミーメーシスを行う者は、それが人を喜ばすか否かにかかわらず、原型に似ているものを作ることを目的としている。従って、端的に喜ばせることを目的としてはいないことは明らかである。」[44] しかも、これまで述べてきたような詩人たる者は、善という目的に眼差しを向ける。また、詩作は政治術の予備的部門であり、観想的目的ではなく、政治的目的へと魂を導くものであり、ゆえに、詩人は政治家が命じる規定に従って、これまで述べたような仕方で詩作品を善という目的へと導きながら創作することになる。

第10問題（68.3-69.19）

第10番目には、地上の詩人が、そこへと眼差しを向けながら、自らの目的に到達することになるであるような万有における詩人とはいかなる詩人であるのか、という問題が来る。プロクロスはここで、神話論と宇宙論とを結び合わせて、その中における詩人の位置付けを試みている。まず、万有における将軍アレスは政治家たる父ゼウスとともに、宇宙的戦争を整え、より劣ったものの力を抹消することなく、より優れたものがより劣ったものを支配するように計らう。万有における医者アスクレピオスは、万

有における自然がすべての物体を一つに保持し、自然に従うすべてのものが老いたり病んだりすることがないようにするために、万有における自然を力づける。万有における弁論家ヘルメスは、英知的なロゴスを用いて、万有における政治的知性（ゼウス）が欲するようなものが生きるようにと説得する。「同様に、宇宙的な詩人がいるのであって、彼は唯一の物語作者であり、目に見えない美しいことどもについては目に見える美しいミーメーシスを、知性に従うものについては自然に従ったもののミーメーシスを制作し、それを通じて全体において徳が勝ち、悪徳が負かされるようにする調べを用いる。運動がロゴスにしたがって行われるように運動にリズムを与え、すべてのものから生きた一つの調べとリズムを作るのである。この詩人こそは、偉大なる政治家（ゼウス）の知性に眼差しを向ける、偉大なる政治家の偉大なる協力者にして真に教育をもたらす神であると私は主張するであろう。」（68.21-24）宇宙的な詩人とはアポロンである。「魂を源とするすべてのものは、調べとリズムにかなったアポロンの詩である。地上の詩人はアポロンへと眼差しを向けて、物語を伴うにせよ伴わないにせよ、神々を讃えねばならないし、善き人々を讃えねばならないのであって、そうではなく他のものの方を向いているのなら、詩作とアポロンに関して過ちを犯していると知らねばならない。」（69.14-19）第10問題は、一見して明らかなように、新プラトン学派的形而上学に基づく詩学の方向性を暗示する。かくして、プロクロスにおいて詩作は、宇宙論的・神話論的起源を賦与されることにより、一挙に、第６論稿の議論への移行が準備されることになる。

終りに

これまでの内容検討により、第５論稿は、プラトンの教説をかなり忠実に伝えながらも、一部分ではそれとは異質な、特に新プラトン学派的な

理論を前提にしていることがおおよそ分かった。ただし、第6論稿とは異なり、第5論稿は統一的な主題を一貫して追求するというよりも、むしろ、部分的な重複はあるにせよ、ほぼ独立した10の問題の提起とそれぞれの解法とから構成されていることも判明した。しかも、第6論稿を予示する言及はわずかに認められるものの、第5論稿は、概ねプラトンの論述に即応し、それを敷衍する内容のものであった。Sheppardは、第5論稿は、アカデメイアにおける講義、しかもかなり初歩的な講義に基づいて成立したものであると考えている。[45] こうした事情から、第5論稿の執筆時期を第6論稿の執筆時期からは切り離して設定する解釈がしばしば行われている。[46] これは、『註解』全体の構成にも関わる根本的な問題である。[47] しかしながら、『註解』全体に関わる統一的テーマの解釈の提示は、本稿の範囲を越えている。[48] ただ、プロクロスの著作の場合、それらの執筆時期の設定自体が確然としているわけではないのであり、第5論稿の執筆時期と第6論稿の執筆時期とを相対的に区別するだけでは、さしてはかばかしい成果は期待できないのも事実である。また、プロクロスの論述の内には先行する多様なる教説の流入を認めることができるにしても、それらの出自を一つ一つ特定することは不可能であろうし、プロクロス自身にも、それを明示する意図はなかったのであろう。それゆえ、私たちとしても、第5論稿は、初級の入門講義における論議を踏まえた、いわば一種のmiscellanyのごとき体裁のものであると認識した上で、そこにもなお第6論稿で展開される教説の萌芽がいくばくかなりとも秘められていることを確認することができれば、一定の成果とせねばならないであろう。[49] なお、第6論稿については、今後、稿を改めて正面から論じる予定にしている。

文献表

原典・翻訳

Procli Diadochi *in Platonis Rem Publicam Commentarii* ed. W.Kroll, Ⅰet Ⅱ, Leipzig, 1899-1901.

Procli Diadochi *in Platonis Timaeum Commentarii* ed. E.Diehl, Ⅰ, Ⅱ et Ⅲ, Leipzig, 1903-1906.

Abbate, M., Proclo *Commento alla Repubblica di Platone*, Milano, 2004.

Festugière, A.J., Proclus *Commentaire sur la République*, 3 tomes, Paris, 1970.

Festugière, A.J., Proclus *Commentaire sur le Timée*, 5 tomes, Paris, 1966-1968.

二次文献

Bernard, W., *Spätantike Dichtungstheorien,* Stuttgart, 1990.

Bernays, J., *Zwei Abhandlungen über die Aristotelische Theorie des Dramas*, Berlin, 1880.

Coulter, J.A., *The Literary Microcosm Theories of Interpretation of the Later Neoplatonists*, Leiden, 1976.

Cürsgen, D., *Die Rationalität des Mythischen Die philosophische Mythos bei Platon und seine Exegese im Neuplatonismus*, Berlin und New York, 2002.

Dalfen, J., *Polis und Poiesis Die Auseinandersetzung mit der Dichtung bei Platon und seinen Zeitgenossen*, München, 1974.

Dillon, J., Image, Symbol and Analogy : Three Basic Concepts of Neoplatonic Allegorical Exegesis, in : R.B.Harris ed., *The Significance of Neoplatonism*, Old Dominion University, 1976, pp. 247-262.

Gallavotti, C., Eterogeneità et Cronologia dei Commenti di Proclo alla Republica, *Rivista di Filologia e di Istruzione Classica, nuova serie*, 7 (1929), pp.208-219.

Gallavotti, C., Intorno ai Commenti di Proclo alla Republica,*Bollettino del Comitato per la Preparazione dell'Edizione Nazionale dei Classici Greci e Latini, nuova serie*, 19 (1971), pp.41-54.

Hackforth, R., *Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1952.

Halliwell, S., *The Aesthetics of Mimesis Ancient Texts and Modern Problems*, Princeton U.P., 2002.

Janaway, C., *Images of Excellence Plato's Critique of the Arts*, Oxford U.P., 1995.

Kato, H., Mythos and Poiesis-A Possibility of Plato's Poetics, *Aesthetics*, 6 (1994), pp.99-111.

Kuisma, O., *Proclus'Defence of Homer*（Commentationes Humanarum Litterarum, 109）, Societas Scientiarum Fennica, 1996.

Lamberton, R., *Homer the Theologian Neoplatonist Allegorical Reading and the Growth of the Epic Tradition*, University of California Press, 1986.

Laird, A. ed., *Ancient Literary Criticism Oxford Readings in Classical Studies*, Oxford U.P., 2006.

O'Daly, Sheppard（1980）への書評。*Classical Review, new series,* 33（1983）, pp.242-244.

Pichler, R., *Allegorese und Ethik bei Proklos Untersuchungen zur Kommentar zu Platons Politeia*, Berlin, 2006.

Rangos, S., Proclus on Poetic Mimesis, Symbolism, and Truth, *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 17（1999）, pp.249-277.

Rosán, L.J., *The Philosophy of Proclus The Final Phase of Ancient Thought*, New York, 1949.（reprint 2009, The Prometheus Trust）

Rostagni, A., Aristotele e l'Aristotelismo nella Storia dell' Estetica Antica: Origini, Significato, Svolgimento della *Poetica*, *Studi Italiani di Filologia Classica*, 2（1922）, pp.1-147.

Rostagni, A., Il Dialogo Aristotelico περὶ ποιητῶν, *Rivista di Filologia*, 54（1926）, pp.433-470 and 55（1927）, pp.145-173.

Sheppard, Anne D. R., *Studies on the 5th and 6th Essays of Proclus'Commentary on the Republic.*（Hypomnemata, 61.）, Göttingen, 1980.

Sheppard, Anne D. R., Proclus' Attitude to Theurgy, *Classical Quartely*, 32（1982）, pp.212-224.

Struck, P.T., The Symbol Versus Mimesis "Invocation Theories" of Literature, in : B.F.Scholz Hrsg., *Mimesis : Studien zur literalischen Repräsentation,* Tübingen und Basel, 1998, pp.149-164.

Tozu, T.,（当津武彦）、『アリストテレス『詩学』の研究』、大阪大学文学部紀要、19号、1979年

Vicaire, P., *Platon Critique Littéraire*, Paris, 1960.

Wallis, R.T., *Neoplatonism*, London, 1972.

Whitman, J., *Allegory　The Dynamics of Ancient and Medieval Technique*, Harvard U.P., 1987.

＊『註解』からの引用箇所は、慣例に従って、Krollのテクストの巻、頁、行の順番に表記する。ただし、第1巻からの引用の場合、巻の番号は省略した。

註

1）O'Daly, p.242.

2）Laird, p.19.

3）新プラトン学派におけるアレゴリー解釈一般についてはDillonを参照。特に詩のアレゴリー解釈については、Coulter, pp.32-72.Sheppard（1980）, p.145-161. Lamberton, pp.144-161.を参照。プロクロスにおけるἀλληγορίαの同義語・類義語については、Kuisma, pp.62-66を参照。なお、『註解』のみならず、プロクロスの現存著作においては、ἀλληγορία及びその関連語は用いられていない。また、ἀλληγορίαの語義史については、Whitman, pp.263-268を参照。プロクロスの理論が後代に与えた影響については、簡剄なStruckの論文が有益である。

4）cf.『註解』1.74.4-9

5）もっとも、プロクロスの詩学は師シュリアノスの多大なる影響の下に成立したとされる。詳細については、Sheppard（1980）, pp.39-103.を参照。

6）Marini *Vita Procli*,（J.F.Boissonade校訂の希羅対訳本）, Lipsiae, 1814を用いた。その英訳は、Rosán, pp.11-32を参照。

7）9世紀のポティオスの手になるその抜粋が伝わる『文学便覧』が、プロクロスのものであるのかどうかについては議論の分かれるところである。*The Oxford Classical Dictionary* Third Edition Revised（2003, p.531 et p.1251）では、現在でもなおその帰属をめぐっては論争が終熄していない旨の記述がある。なお、Lamberton, pp.177-178は『スーダ辞典』の記述に基づき、『文学便覧』をプロクロスに帰している。

8）Festugière, *Commentaire sur la République*, tome Ⅰ, pp.7-8.

9）cf.Plato, *Phaedo*, 61B3sq.

10）cf.Cürsgen, Pichler et Kato.

11）Festugière, *ibid*.

12）Festugière, *Commentaire sur la République*の各巻の冒頭には詳細な内容目次が付されており有用である。Sheppard（1980）, pp.203-205でも同様に、『註解』の内容を直感的に把握できるように簡便な目次が補遺として付されている。

13）Plato, *Resp*.3.398A1sq.

14）Sheppard, pp.106-107.

15）Plato, *Resp*.2.377Esq.et392Asq.

16）Abbate, p.351.神々を指し示すために詩人が用いる不適当な表現（le espressioni sconvenienti）は、神的実在における真理を隠蔽するための道具

であり、プロクロスはそれを幕（παραπέτασμα）と呼ぶ。真理は、人間の言葉では記述されえないので、アレゴリーを手段として呈示されることになる。アレゴリーに用いられる言葉は、神々との関係で言えば不適当なままに留まる。cf.Festugière, pp.62-63.n.1.醜い言葉の背後には、アレゴリー解釈を通じて明るみに出されるべき美しい真理が秘匿されているという確信が、プロクロスの詩学、ひいては新プラトン学派の詩学全般の大前提である。

17）Plato, *Resp.*2.379Asq.

18）Halliwell, p.326.

19）Plato, *Leg.*3, 668Csq. Festugière（p.64.n.1）も指摘しているように、『法律』では「正しさを伴った善さ」という表現はそのままでは出てこない。　なお、似つかわしくないミーメーシスが二通りの仕方で現われるとして、「似つかわしくない模倣は、ちょうど画家がアキレウスを模倣しようとしていながらテルシテスを描いたり、アキレウスを描いてはいるが、勇敢な振る舞いを保持していない様で描いたりするような場合と同じようなことをしている。」（46.3-5）とプロクロスは述べるが、この区別立ての意図は判然としない。Sheppard（1980）, p.108では『国家』第2巻377E1-3との関連が指摘されているが、『国家』の当該箇所でもこうした区別立ては行われていない。これに対して、Abbate, p351は46.6に否定詞οὐを補って「正しさを伴わない善さ」（la buona fattura <non> congiunta a correta rassomiglianza）と翻訳（p.75）する。すなわち、プロクロスはむしろ669Bを参照しているとAbbateは考えるわけである。当該箇所では、ミーメーシスの判定基準として1.ミーメーシスの対象についての知識、2.ミーメーシスの正しさについての識別、3.ミーメーシスの立派さの認識の三つが必要とされる。従って、Abbateによれば、Il casa del pittore che rappresenta sì Achille, ma un Achille che non bada alla vita valorosa, risponde al terzo criterio, ma non al second ed al primo.Per questo l'imitazione è dissimile.ということになるが、なおやはりなお釈然としないものが残る。

20）46.7の「似つかわしくないミーメーシス」は「似つかわしいミーメーシス」の誤写であろう。Festugière, p.64.n.2. Pichler, SS.60-61.n.137.

21）Plato, *Leg.*2.656B.『註解』46.29-47.2.

22）Festugière, p.66に基づいて訳出した。ただし、Abbate, pp.351-352はFestugièreの解釈を批判している。Festugièreは48.8　θέλξαντα が48.7-8のτὰ τελευταῖα τῶν πνευμάτων を受けると解するが、Abbateは48.3のτὰ συμβολικῶς λεγόμενα を受けると解する。Abbateに従って48.8-10を訳せば次のようになる。「象徴的に語られる言葉はそうした象徴によって魅惑し、神

の息吹が神霊から私たちに妨げられることなく発出してくるように力を貸すのであるが、まるで神々は自らの好む言葉と事柄とによって満たされているかのようである。」Abbateの翻訳（p.79）の方が明晰であるかもしれない。

23）Pichler, SS.56-64は、第1問題と第6論稿の関係を詳細に論じている。なお、第1問題の末尾（48.12-26）で論じられている、色とりどりさに対する単純さの意味については、Rangos, p.254を参照。

24）Sheppard（1980）, p.146. なお、プロクロスと降霊術の関係については、Sheppard（1982）を参照。

25）Aristoteles, fr.81（Rose）.亡失の『詩学』第2巻（Bernays, pp.45-53）、もしくは同じく亡失の『詩人論』（Rostagni（1922）, pp.22sq.et（1926）, pp.453sq. Gallavotti（1971）, pp.41-54）への言及であろうと考えられている。なお、『詩学』第2巻及び『詩人論』をめぐる詳細な学説史的究明としては、当津武彦、49-74頁を挙げておかねばならない。

26）Bernays, SS.45-53.Festugière,, p.68.n.1.

27）Sheppard（1980）, p.113.SheppardはBernays, Rostagni, Gallavotti（L'Estetica Greca nell'Ultimo suo Cultore, Turin, 1933, pp.25sq.未見）などの研究者が、プロクロスのテクストの内にアリストテレス的要素を探るに急なあまり、プロクロスがここでプラトンとアリストテレスを調停しようとしていることを見落としていることを批判し、Wallis（pp.23-25 et pp.143-144）に従って、アリストテレスに対する新プラトン学派的な一般的態度の在り方をここに認めようとする。また、SheppardはBernaysとともに、カタルシスに関する教説の新プラトン学派的なsourceはイアンブリコス『秘儀について』1.11.39.14-40.8.であるとしている。それは、カタルシスを降霊術の秘儀による浄化と結び付けるものである。もとより、アリストテレスがカタルシスなる語で何を意味していたにせよ、イアンブリコスとプロクロスに見出されるカタルシスは、後期新プラトン学派に典型的な宗教的色合いを帯びたものである。ただし、イアンブリコスはこのカタルシス概念を悲劇と喜劇に適用したが、プロクロスはあくまでもプラトンに忠実に、その有効性を否定しているという相違はある。なお、アリストテレスのカタルシスと『註解』の当該箇所との関係についての詳細な学説史的研究としては特に、当津武彦、54-55頁があり、裨益されるところ大である。

28）こうした言及は、プロクロスが弁論術や詩学の教本に精通していた証左であろう。Sheppard（1980）, pp.117-118を参照。

29）Festugière, p.70.n.1.なお、Sheppard（1980）, pp.116-117はthe experience of life, Abatte, p87はvisione penetrante della vita という訳語を与えてい

る。性格描写と解すると表現技法という術知を連想させ、tautologyになる懸念があるので、そうした描写を多彩にする広義の人生経験と解したほうが、すっきりするかもしれない。ただし、Abbate, p.352は53.9-10のτῆς τε γνώσεως καὶ τῆς ζωῆςについてi due termini sono uniti in endiadi.と述べているが、ここでは二詞一意ではなく、劇創作における二局面の区別が意味として期待されているのではあるまいか。

30）Gallavotti（1933, pp.30-31.）はここにarsとingeniumの対照をみとめているが、Sheppard（1980), p.117によって的確に批判されている。

31）Sheppard（1980), pp.115-116によれば、こうした齟齬に関する批判は、アリストテレスの弟子アリストクセノスによるものであるという。

32）これまでの議論においては、ムーシケーは狭義の音楽を意味していたが、第5問題以降は意味層が拡大するので、ムーシケーと音訳しておく。

33）Sheppard（1980), p.40 and n.4, pp.120-121. Hackforth, p.84.Vicaire, pp.50-56. 特に、Vicaireに対する批判としては、Dalfen, SS.119-134を参照。他方、プロクロスに淵源をもつこの問題をanachronismとして一蹴する研究者もいる。例えば、Janaway, pp.164-165を参照。

34）57.10は、Festugière（p.74.n.1）の読みに従う。なお、Abbate, p.95もこの読みに従っている。

35）『国家』第10巻における「真理から遠ざかること三番目」というミーメーシスの規定は、『註解』においても頻出する。Festugière, p.75.n.1.Halliwellは第5論稿におけるミーメーシスはdescriptiveな概念であって、the general representational status of poetryを指示し、この規定は第6論稿においても基本的には堅持されているとする。他方、第6論稿（177.7-178.5）において区分される三つの生に対応する神憑り的詩、教育的詩、模倣的詩のうち三番目に位置付けられているミーメーシスはevaluativeな概念に基づくものであり、それはthe lowest rung on the ladder of poetic typesとして機能するものとしている。pp.327-333.

36）Sheppard（1980), p.121.

37）Sheppard（1980), pp.113-115では、アリストテレスのプラトン批判とプロクロスによる両者の立場の調停が簡潔に説明されている。すなわち、宗教的熱狂状態に相応しいとアリストテレス（『政治学』8.7.1342a28-b17）が考えるプリュギア調をプラトンが『国家』第3巻399A-Bで残しているのは、教育的配慮というよりも降霊術の秘儀のためであった、という内容である。

38）Plato, *Leg.*2.669C3.

39）想念の弁論術的意味については、Sheppard（1980), p.118を参照。

40）『プラトン『ティマイオス』註解』90.16sq.で、批判者はカリマコスとデュリスで、擁護者はロンギノスであるとされている。Sheppard（1980）, p.116を参照。

41）Festugière, *Commentaire sur le Timée*, tome Ⅰ, p.128, n.2.Abbate, p.353.

42）主題（res）と言葉（verbum）の二分法は弁論術的である。Sheppard, pp.118-119を参照。

43）ここで注意するべきは、ミーメーシスが初めてimpersonationの意味で使用されている点である。『国家』においても、最終的に許容されうる語り方は、善き人々をミーメーシスする僅かな部分を含んだ叙述であった。3.396B-E.

44）Plato, *Leg.*2.667C10sq.もっとも、『法律』における議論は、プロクロスの記している推論とは正確には一致してはいない。『法律』の当該箇所では、おおよそ次のようなことが述べられている。ミーメーシスは本性上常に「何か」のミーメーシスである。それゆえ、ミーメーシスの判定基準としては、有益性・真実性・類似性が尊重されねばならず、ミーメーシスのもたらす快楽も本来はそうした基準に付随して生起するものである。ただし、その基準に付随せずに生じる快楽は、無害な快楽、すなわち遊びである。

45）Sheppard（1980）, p.25.

46）Sheppard（1980）, pp.15-38.Pichler, SS.51-53.

47）cf.Gallavotti（1928 et 1971）これに対する批判としては、Sheppard（1980）, pp15-38を参照。

48）Cürsgen と Pichlerはそれぞれ、第16論稿、すなわち第10巻後半の「エルのミュートス」釈義の読解を中心に据えて研究書を上梓しているが、その方向性は、ホメロスの神話のアレゴリー解釈の手法をプラトンのミュートス解釈に適用して、プラトンとプロクロスをAllegoreseにおいて架橋しようとする限りでは、一致している。ただし、両者においても、第6論稿と第16論稿の内的な連関性の解明は依然として不十分であり、物足らなさを感じた。なお、Abbateのギリシア語－イタリア語対訳に付されている序論は、第6論稿と第16論稿という肝心要の部分についての考察を欠いているので、本稿ではその一部を参看するに留めた。

49）Kuisma, p.71.

（文学研究科准教授）

本論文は、平成22年度大阪大学大学院文学研究科共同研究費（研究課題「神話表象の芸術化過程のメカニズムに関する研究―ギリシア神話に即して―」の助成に基づく研究成果の一部である。

SUMMARY

A Study of the Fifth Essay of Proclus' *Commentary on Plato's Republic*

Hiroshi KATO

Proclus Diadochus (successor) who esteems to be the last philosopher in ancient Greece is not very widely known as having brought the poetics in antiquity to completion. Generally speaking, the most distinctive feature of the Neoplatonist poetics is reckoned as a kind of allegorical interpretation of Homer's epics. When Christianity was increasingly extending its influence and the pagan Greeks were inversely on the verge of loss of self-identity in their own traditional religion, Proclus undertook intrepidly to consolidate the foundation of the Greek religion metaphysico-theologically by means of interpreting allegorically the Homeric myths and demonstrating the substantial and essential coincidence of Homer's epics with Plato's philosophy as far as he could understand it. It is in this *Commentary on Plato's Republic* that he reveals such a seemingly paradoxical theodicy. In the fifth essay, he makes a brief statement of his opinions about *poiêsis*, while giving many exegetical elucidations about Plato's text as such. This essay consists of ten problems and answers to them. Instead of giving a word-to-word commentary and unfolding fully his own original poetics, he investigates the possibility and condition of *poiêsis* on the basis of metaphysics, theology, theurgy, politics, pedagogics, psychology, musicology, rhetoric and poetics. Therefore, we must be satisfied merely with confirming that it foreshadows a glimpse of the theories developed in the sixth essay, in which we will encounter one of the most circumstancial and subtle explications of Homeric allegorization and find that Homer and Plato as it were miraculously accord with each other in the whole system of Proclean philosophy.

キーワード：プロクロス，プラトン，ホメロス，アレゴリー，新プラトン学派